琉球大学学術リポジトリ

沖縄・大正文学史粗描：新たに見つかった新聞を通して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2017-05-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36708

沖縄・大正文学史粗描

―新たに見つかった新聞を通して―

仲程昌徳

近代沖縄の文芸動向が鮮明になるのは、明治三十二年ごろからである。そして、大正七年ごろまで、比較的よく知られているが、大正八年以後は空白が目立ってくる。理由は、単純で、現地で刊行されていた新聞が保存されてないことによる。

新聞の所在が不明になると、文芸動向もよく分からなくなっていくことをそれは示しているが、近年、僅かずつだとはいえ、これまで所在の不明だった新聞が収集され、その集成がなされるようになってきた。それによって大正期の文芸活動の空白部分も、少しずつ埋めることができるようになってきている。

現在見ることのできる纏まったものとしては、名護市史編纂室篇になる「宮城真治資料　新聞切り抜き篇」[1]、琉球大学図書館所蔵「琉球新報・沖縄タイムス・沖縄朝日新聞（一九二四）」[2]、そして沖縄県資料編集室篇になる「植物標本より得られた近代沖縄の新聞画像」[3]の三つがある。

「宮城真治資料」は、大正八年から十一年、十三年、十四年、十五年と飛びとびに、県資料編集室編になる「新聞

画像」は、大正九年ごろから大正十四年までやはり飛びとびに、琉球大学所蔵は、大正十三年だけが飛びとびに集められているというように、ほとんどが不揃いだとはいえ、貴重このうえもないものとなっている。

これら三つの新聞集成から文芸関係記事を抜き出してくることで、これまで空白になっていた箇所の幾分かを埋めることができるようになった。

本稿は、大正八年から十五年までのその粗描である。

○

大正八年十月二十二日付け『沖縄時事新報』には、末吉莫夢の次のような作品が掲載されていた。

新秋夜坐　末吉莫夢

肅斉独坐眼前秋。山気稍驚冷廠裘。唧々吟蟲如促酒。満身風露夜悠々。

秋日開詩筵

菊花雖不飾庭前。吟客心幽酒興牽。陶令何知吾辈楽。松涛瑟々入詩筵。

末吉の漢詩が出た大正八年には小谷野□（筑？）峰の七言律詩「偶成」及び七言絶句「源為朝」の二編が見られる。小谷野についてはよく分からない。

末吉莫夢の漢詩は、「新秋夜坐」の他に、大正十年六月十三日付け『沖縄タイムス』に「端午即題」、大正十三年の年月は不明だがやはり『沖縄タイムス』に「港川貧遊行」が見られる。

沖縄近代文学史は、漢詩について、殆ど触れることなく、通り過ぎてきたといっていい。明治期にはいくつもの

結社があって、漢詩壇も随分賑わっていた。そして、末吉が「端午即題」で、名前を出していた真境名笑古等が、[4] 大正六年まで活動していたことも分かっているだけでなく、その後も、僅かながら末吉らによって漢詩が詠まれていたのである。大正期の文芸界においても、漢詩は、一つの位置を占めていたのである。

末吉莫夢は、末吉安恭の筆名の一つ。末吉は、明治期の文芸界では俳人麦門冬、歌人落紅として知られた人である。大正期になると文化史に通暁したジャーナリストとして健筆を振るった。

末吉安恭が新聞に発表した俳句、短歌、漢詩以外の文章を、一括して「歴史、文化論考」としておくと、その分野においても彼は、第一人者であったといえるし、その健筆ぶりには、驚くべきものがあった。

末吉は、「新秋夜坐」を発表した翌月の大正八年九月から十一月にかけて、「玻名城政順」の「人物性行」「其の歌歴」「其の歌風」等について六回にわたって連載、引き続き「渡久山政規」、「南山俗語考を見て」「首里の製紙業」「琉球と朝鮮の交通」の連載、「朝鮮人の観たる琉球」、「大里遊記」、「大里城時代の琉球」を七回にわたって連載、「巴志の二山征服」の発表といったように、歌人、言語、産業、海外との交流、琉球の歴史に関する論考を相次いで発表、大正十一年になると「鶏声犬語」「陽春雑筆」「雨糸風片」、大正十二年には「雨すだれ」「老榕の弄」「安楽椅子」と題した欄で、大隈重信や山県有朋といった明治の重臣たちについて触れたり、倭寇について論じたり、儒教、道教を論じて程順則、蔡温に筆をのばしたり、日章旗について論じたり、井伊大老を刺殺した下手人の話から国民性の問題に及んだり、俳諧にあらわれた人妻へのあらぬ恋をとりあげたり、寄宿舎問題から青年たちの思想問題に転じたり、おもろに歌われた英雄たちを紹介したりと、紙面に登場しない日はないといった健筆ぶりであった。

大正十三年もひき続き「サボテン」「百日紅」「桑の落葉」といった欄で、沖縄の「姓名」について、「仏蘭西と琉球」の関係について、さらには「組踊」についての考察を精力的に発表している。末吉の「歴史、文化論考」の全

容を知るには紙面の欠損が多すぎるが、その題材の豊富さ、その洞察力の異色さは、収集された断片からでも十分に窺われる。

末吉は、「歴史、文化論考」を書き継いでいくかたわら、大正十二年十月三十一日には、次のような短歌九首も発表していた。

中頭追吟

末吉落紅

「孝行の巻」の舞台にわれ立ちて漏池をはかる糸車かな
同行の二中の生徒□池の辺に若衆のごとたゝずみしかな
波のよ□津堅の島にいむかいて泡瀬の医師と旅かたりせし
珊瑚礁、こは海底の園なれや小鳥のごとき魚のむれ見つ
心中の女も生きて三味弾け□□のはたご忘れかねつも
たくましき女のむれの夕沼に芋洗ひつゝ旅の人見る
赤人の家にやどりて生鰹□朝にたうべ夕べにたうべし
赤人の幾代の孫□痩翁□沖□鴎のごとき□姿
伊波の按司が倭寇を打つて退けし六角棒をふりたてゝ見き

明治期の俳壇、歌壇を領導して来た一人であった末吉は、大正期になると、その才能を歴史や文化の考察に傾け

ていったようにみえるが、漢詩や短歌の創作を忘れていたわけではないのである。

「中頭追吟」九首は、歌題にもなっているように、読谷や離島津堅での見聞を詠んだものであった。沖縄の歌人が、沖縄の文化や習俗を積極的に取り上げて歌うようになっていたことが、分かる九首である。

末吉が、大正八年に発表した漢詩から、彼のあと一つの活動分野であった歴史や文化を論じたその才筆の多彩さに目がいったことで、大正十三年まで筆が伸びたが、再度漢詩に戻れば、莫夢のそれは、明治期の文芸活動の延長を示す大切な指標となっていた。

明治の文芸界とのつながりを示すものとしては、あと一つ和歌の詠歌集の掲載があった。

大正八年九月八日に掲載された、和歌の結社「同風会」の「八月兼題」作品がそうである。明治期の沖縄で最初の和歌の結社として登場した同風社の活動が、まだ続いていたのである。

新聞は、明治期に活動をはじめた結社の作品の掲載も厭わなかったようだが、新しい動きを求めてもいた。そのことをよく語っているのが、『沖縄時事新報』の社告「思潮と評論」である。大正八年の月日は不明だが、「汽船発着広告」から、十一月二十五日に掲載されたのではないかと推測される。

思潮と評論

＝内外思潮の紹介に

＝本社の新しい計画

本社は内外の新思潮を広く県民に紹介する意味に於て中央に於ける知名の士の意見を徴し時事一篇本紙に掲載せんとす　其の内容は政治、経済、文学、哲学、宗教等其他各方面より網羅し一局部に偏せず全般の思潮に亘

り坐ながらに諸名士と交膝対談其の卓論名説を聴取するの感あらしむべし。而して之を集むれば一部の思潮変遷史ともなるべく随時散見しても内外諸問題の解決に資する津梁たらしむべし。これは本社の新しき試みとして聊か誇るに足るべきを信ず　其の材料蒐集は中央に於ける有力なる通信社に依頼したるを以て材料の精選されたることは堅くこれを保障す

新聞は、そのように「政治、経済、文学、哲学、宗教等其他各方面」にわたる「新思潮」の紹介に意欲を示しているが、その実態は、新聞が欠落しているために、よく分かっていない。

比嘉春潮は、「思潮と評論」が掲載される一年前の大正七年、松山小学校校長を止め、沖縄毎日新聞社に入社、半年ほどして沖縄朝日新聞社に移っているが、記者時代に刻印された「ロシア革命から受けた新鮮な印象」や、鈴木文治、賀川豊彦らを中心とした一派が発行した『労働新聞』、大杉栄らが出しては発禁となった『平民新聞』『近代思想』『文明批評』、荒畑寒村、山川均、近藤憲二らが出した『青服』等が、「直ぐに沖縄にも渡ってきた」ばかりでなく、「こういった中央の思想は沖縄にもそれぞれ信奉者のグループを生み出した」といったことを書いていた。[5]

「思潮と評論」の広告は、変動する社会情勢にうながされるようにして出て来たものであったに違いない。大正八年八月二十六日、『沖縄朝日新聞』に掲載された上里生の「詩壇雑話」は、新しい兆候が、文芸面でも現れはじめていたことを示すものであった。

上里生はそこで、ドイツで開戦以来発表された「抒情詩」の数が膨大な数にのぼることに触れ、それが国民一般の「文化の程度」をよく示すものであるといい、翻って我が国ではとして、それが「物の埒外に置かれてゐる」こと、「韻律に対する愛、及び想像性を展開せしめる様な言葉に対する尊重は、この国の民に欠けてゐるのであらうか」

と嘆き、「嗜みのある人なら小説を論ずるよりも詩を論ずる方が遥かに趣味が深いのだ」と結んでいた。

上里生は上里春生。上里の登場はそのあと大正十二年五月十四日付け『沖縄タイムス』に「詩話」と題したエッセー、同じく同紙大正十五年一月十五日に「葛原幽氏の近作童話を読む」が見られるだけだが、当時の新聞が見つかれば、大正中期から活躍した詩人であったことがわかるに違いない。

○

大正九年になると、真佐雄の「或る恋歌　一幕二場」が、『沖縄時事新報』（二月十九日）に掲載される。七月二十日には白浪庵の「龍舟　一幕二場」など、琉球歴史に材をとった戯曲の掲載をしている。そして大正十年二月二日には『沖縄朝日新聞』に、山城正忠の戯曲「民衆講談　英傑アマワリ」が発表されていて、大正九年頃から、琉球歴史に材をとった戯曲が一種の流行になっていたように見える。そして、そこには末吉莫夢の歴史論考が、微妙に影を落としていたように考えられる。

真佐雄は上間正雄、明治末期『創作』に詩や短歌を発表、末吉落紅に「郭専属の歌人」と評された人で、北原白秋、吉井勇らの影響を濃く受けた歌人である。明治末には「戯曲　ペルリの船」、大正六年には、戯曲「時花唄」を発表し話題を呼んだ。[6] 上間についても、新聞が出てくれば、さらに多くの作品を発表していたことがわかるに違いない。

大正九年九月十二日には「琉球歌壇」に「悲しき歌稿（一）」として北村白楊の短歌六首が掲載されている。歌は次のようなものである。

肺尖を病みて帰りし子の前に母よ何をば憂ひ給へる

近眼にて眼鏡をかけし事にさへ不具児の如母は嘆くも
浪のひびきしるく高まり病み心思ひ切なる島の夕ぐれ
泣かましき心おさへて独り居ぬ父母に悩みの涙見らゆな
我れ死なば後に残れる父母の嘆き思ほゆ病みの心に
病みし子の側にありてひとすぢに父は網をばつくろひゐるも

父母に心配を掛けまいとする病者の心情が素直に表白された歌群である。

北村の名前が見られる記述には「一九二〇年（大正九年）四月ごろから、名護に北村白楊、宮木美重三、島袋九峰（源七）らが同人誌『街路樹』をだすころ、那覇にはなにもない、という一時期もあった」というのがある。大城立裕の記述になるものである。[7] 大城は、その情報をどこから得たのか明記してないが、浦崎康華の『逆流の中で近代沖縄社会運動史』を見ると、「稲福千代治を中心として北村白楊、宮城美重三、赤司しげし、浦崎夢二郎（康華）の五人が恩納部落の田場旅館で、一九一七年（大正六年）三月に集まり詩歌や鈴木三重吉が発行して好評を博していた児童雑誌『赤い鳥』の批評などをしたのち、五人で同人雑誌『街路樹』の発刊を決議した」と書いていた。浦崎はまた『街路樹』について「詩歌、随筆で埋めることにし、原稿と分担金は稲福のところに送り、編集とガリ版刷り三十ページほどの綴込みまで稲福がしたが、三、四号で廃刊した。しかし当時は琉球新報、沖縄朝日の両紙に詩歌、随筆を発表するほかに同人雑誌や回覧雑誌など、那覇、首里で相当発行され詩歌の盛んな時代であった。そして『街路樹』は北村白楊が大宜味小学校へ、宮城美重三が喜如嘉小学校へ、赤司しげしが恩納小学校から遠く朝鮮慶尚南道普州城外の小学校へ相前後して転任したために廃刊の止むなきに至った」と続けていた。

浦崎はそのあとで「喜如嘉の平良真順医師の娘ひさ子が『街路樹』を愛読していたという話を『山原の火』の著者山城善光から聞かされたが、『街路樹』の内容は現在全然覚えていない」ということだったと付け加えていた。「喜如嘉の平良真順医師の娘ひさ子が『街路樹』を愛読していたという」記述は、女性読者の登場といった問題を投げかけていた。沖縄では、一体いつ頃から女性の読者、とりわけ文芸雑誌などの読者が登場してくるのだろうか。

伊波冬子は、「読書について」[8]で「私の学生の頃の社会情勢は、女の読書が一般的なものではなかったので、教科書以外の本を読む人が極少なく、読書の習慣がついてなかった」といい「五十年前までは、女の子が人前で読書をしていると生意気に見られた」と回想していた。「読書について」が書かれたのは一九六〇年の八月。それから逆算すると、一九一〇年、明治の末頃まで、女性が「読書」をするのは珍しいことであったようだが、大正にはいると、沖縄県立高等女学校の在学生たちは、教師から「藤村や啄木、漱石、樗牛、モーパッサンという名前」を聞き、「読むことのいかに楽しいかを知った」ばかりか、その教師に「文学少女で通っていた忍冬女史や玉城おと、松田かめたちは熱い血潮をいやがうえにも燃やしていた」という。[9]忍冬女史・冬子らと同様に「喜如嘉の平良真順医師の娘ひさ子」もまた「文学少女」で、『街路樹』を手にとったのであろう。

白楊らが属した『街路樹』についてもう少し触れておくと、その発刊が、大正六年には決議され、三、四号で廃刊したという浦崎の言と、大城の「一九二〇年（大正九年）四月ごろから」というのとでは、少し違いがみられる。また大城は「同人誌『街路樹』をだすころ、那覇にはなにもない、という一時期もあった」と書いているが、浦崎は「当時は琉球新報、沖縄朝日の両紙に詩歌、随筆を発表するほかに同人雑誌や回覧雑誌など、那覇、首里で相当発行され詩歌の盛んな時代であった」と書いていて、やはり違いが見られる。欠落している大正期の新聞の発掘が進めば、雑誌の刊行年月日など簡単にわかることだろうが、今のところ、異なる意見があるということで止めてお

くしかない。

○

大正十年には、次のような詩の掲載が見られた。

円覚寺の春は寂しい

漂雁

円覚禅寺の春の
くれがたよ！

円覚禅寺の春は寂しい
日はなゝめに傾き雑木の
すきまから漏れる

梵鐘は青錆にさびて
正方形の赤い敷瓦は
青き苔に埋まれたり

何百年の過去の思ひ出は

静かに吾が胸によみがへりぬ

獅子窟殿堂の祭壇の添られたる唐金の
香炉からは線香のけむり
たえまなく紫にゆれあがる

悲しい心を抱いて
拝殿に跪き
祈祷する乙女よ！

おゝ！
円覚禅寺のくれ逝く
春は寂しい

大正十年五月六日付け『琉球新報』に、掲載された漂雁の一編である。

漂雁は、古波鮫漂雁。大正五年五月六日付け『琉球新報』の「読者倶楽部」欄に、「長詩「乞食」」を発表していた。その特異な題材は、注目に値するものであった。

大城立裕は「文芸の人たち」で、一九一六年（大正五年）ごろ、「詩では古波鮫漂雁がおり」と書いていた。漂雁

は、確かに大正五年に「長詩「乞食」」という詩を読者の投稿欄である「読者倶楽部」に発表していた。「読者倶楽部」欄に一篇の詩を発表しただけで「詩では古波鮫漂雁がおり」とはいえないはずで、大城は新聞以外の資料を見ていたと考えられるが、大正十年に発表された「円覚寺の春は寂しい」の一編からしても、漂雁が他に抜きんでていたことは分かる。

大城は、また「大正中期に、古波鮫漂雁・世禮國男が活躍した」とも書いていた。世禮國男は、大正十一年、川路柳虹、平戸廉吉が序文を寄せた『詩集　阿旦のかげ』を発刊。大正期の詩壇を代表する詩人として知られた。世禮とともに活躍した、というには、漂雁の作品は、あまりにも少ない。

今のところ「円覚寺の春は寂しい」以外の詩を見つけることはできないが、大正十三年には戯曲「妻の再婚を願ふ男　一幕二場」を発表していて、詩以外の分野にも挑戦していたことがわかる。

大正末から精力的に小説を発表するようになる新垣美登子は「はじめて小説をお書きになったころの文学仲間といいますと、どういった方たちですか」と問われ、まっさきに「古波鮫漂雁」を上げていた。[10] 新垣の言葉からも、漂雁が大層良く知られていたことがわかるだけに、彼の作品の発掘がまたれる。

○

大正十一年は、先に触れた世禮国男の『詩集　阿旦のかげ』が二月に刊行され、十月には池宮城積宝の小説「奥間巡査」が『解放』の懸賞小説に入選するといったように、大きな話題を呼んだと思われる詩集と小説の出た年であった。

新垣美登子は、『哀愁の旅』で、「「奥間巡査」のことで、『琉球新報』に池宮城寂泡の履歴が、写真とともに、で

かでかとのっている」と書いていたが、残念なことに、大正十一年の新聞は、「宮城真治資料」だけで、そこに残されているのは、末吉の記事が中心で、世禮や池宮城に関する記事は見られない。

大正十一年は、収集された新聞がごくわずかなために、大正文学史の事件であったといえる詩集の刊行、懸賞小説入選作品に関する記事を見ることができない。また、他にどのような文芸作品が現れていたかについてもその多くを知ることができない。

○

大正十二年には、池宮城積宝の短歌が『沖縄タイムス』（十月三十一日）に掲載されている。

郡にありし頃

池宮城積宝

中頭□□校街□□□し頃□よむ□□□生命□□□き
かの頃は座喜味城下にたゞひとり酒など酌みて世を悲しみき
長浜の白き沙をさく〳〵と踏み行きけれ□心なごみき
岬には風吹き渡り百舌鳥鳴きて夕さびしき海の声きゝし
泡瀬の海青くたゆたひ半島の山あきらけく見えにける昼
日曜日は漏池あたりの松林にさまよふことを習ひとしけり
天才のきこえありしというふ教師泡盛飲みて遽かに死にける
比謝川へいなを釣るとて通ひしはわが生活の閑多き頃

酒飲めば身の薄幸を嘆き居し検定上りの老教師かな
比謝橋の昔のなげきおもはるれ今はたわれも恵みうすけれ
ガタ〳〵の古き馬車にもなつかしき思ひ出はありかの比謝川に
そのかみにエービーシーを教□□る生徒はやがて弁護士□□（以下不明）

池宮城積宝は広津和郎の「さまよへる琉球人」に登場してくるモデルの一人で、金城朝永は彼について「モーパッサンの訳書を持逃げしたO青年は自他共に放浪詩人の名で呼び慣わしていた池宮城積宝で、作詩のかたわら観相家業をもかね、近年まで各地を放浪していた。同氏は語学にも秀で県立二中の教職を退いて上京後、一時英米探偵小説の下翻訳などに従いながら中央文壇への進出を志し、当時『改造』とならび称せられていた総合誌の『解放』の懸賞に応募して「奥間巡査」という短編が当選した」といい、当選作の紹介をしたあとで「氏はまた短歌をよくし、その詩と共に斯界に出しても十分レベル以上に達していると評価する人もあり、今でもその才能は惜しまれている」と述べていた。[11]

積宝の才能については、宮城聡も「当時の沖縄は、僻地中の僻地で、沖縄に取材した小説など、還みられない、無視された地位にあった。不世出の天才でないかぎり、沖縄で、文学することは考えられなかった。その意味からして、池宮城積宝さんは才文に恵まれていたと思う」と書いていたが、[12] 積宝が「才文に恵まれていた」のは間違いないし、「短歌をよくし、その詩と共に斯界に出しても十分レベル以上に達していると評価」されたというのもうなずける。

積宝の詩には次のようなのがあった。

子守唄

小さき友伸の為めに歌へる

池宮城積宝

ねんねんよう、おころりよう
坊やはよい子だ、ねんねしな

お山の梯梧は何時咲いた
真赤な梯梧は今朝咲いた

お山の梯梧をとつて来て
真赤なお衣裳を作りましよ

坊やはよい子だ、ねんねしな
ねんねんよう、おころりよう

黒いお船は何時ついた
大きな船は今朝着いた

黒いお船は何積んだ
坊やのおもちやを積んで来た

ねんねんよう、おころりよう
坊やはよい子だ、ねんねしな

大正十三年四月三十日「朝日詩壇」に発表されたものである。

積宝と新垣美登子との間に長男伸が生まれたのは大正十一年。美登子にはすでに積宝を夫だと想う気持ちは失せていたが、美登子の父親には、「子供の名前は父親に考えさせなければならない」という信念があって、美登子がやむなく「男の子安産、名前をしらせよ　みと子」と電報を打つと、翌日積宝から「伸という名はとこしへに清くあれ　おろかなる父に似ることあらすな」という歌を書いた電報が返って来たという。[13]

自分の息子を「小さき友」としている所にごく〳〵普通の父親にはなれない積宝の思いを見て取ることが出来る。

「郡にありし頃」十二首は、座喜味、長浜、泡瀬、漏池・比謝川といった中頭一帯を詠んだものだが、家にいつかず各地を歩きまわった積宝の一面を語る大切な作品群となっている。

「奥間巡査」入選後、池宮城は、そのように短歌や詩を発表しているが、もちろん、小説も書いていた。断片ながら『沖縄タイムス』大正十二年十月には「中間小説　燃える市街」の連載がみられるし、『沖縄朝日新聞』大正十四年六月には「創作　恋愛以前」の連載も見られる。

短歌や詩を発表するとともに「中間小説　燃える市街」、そして「創作　恋愛以前」の連載と、積宝の創作意欲はいささかも衰えてなかったのである。

○

大正八年、九年、十年、十一年、十二年は、新聞の欠落が多いだけでなく、収集されていても、学芸欄の紙面が欠けているといったこともあり、少ない情報しか得られない。とはいえ、これまで見て来たように八年、九年、十年から分かったことがなかったわけではない。十一年、十二年の紙面からは

朝日歌壇（大正十一年五月六日付け『沖縄朝日新聞』）

闇の浜に　　新里　黒潮

呪ろわれし若き男の悲しさよ闇の夜浜に独り泣きたり

夜光虫渚に光れり小夜更けの浜□語らう悪魔の恋

黒潮よ人魚乙女の忍び声を静かに流せ孤島の磯に

夜の浜に波と戯る幻影の乙女を恋ひて今宵また来し

タイムス歌壇（大正十一年十月十五日付け『沖縄タイムス』）

秋空　　永吉生

やうやくに雨は晴れたれこの朝げうらゝ秋日の照ればうれしも

うらゝ日に大青空はのんびりと晴れて風なく秋めきしかな

風立ちて秋の日と亦なりにけり土にさす陽のほのぬくみかも
いきどほろしき心なりせば吾妹子のそのさびしさもひやゝかに見つ
庭見れば苦しきけふの深蟲り雨も降らぬかあじさひの花
培ひし向日葵草の枯れ行きし頃よりわれは心すさみぬ
誰れになく恋する性を持てるてふこの小娘の指は細きかな（以下三首小娘へ）
うるわしきさ乙女なればいさゝかの葡萄の酒を強ひにけるかな
小娘は酔ひにけらじな葡萄酒のようはうれしくなまめかしけれ
この三月夜毎夜毎に酔ひよへる友が今宵も酒欲りすらむ（以下四首秋流へ）
酒のめば衣ぬぎすてゝいち早く踊る友をば酔はせざらめや
酔ひよへば眼じみらに歌うたふこの枕流を酔はせざらめや
花の咲く春さり来れば呑みわかれ、この酒飲みの友とわかれん

タイムス詩壇（大正十二年一月九日付け『沖縄タイムス』）

太陽と彼等　　ざまみ寒風

世の中には
太陽の外には
なんにも知らぬ人が多い。
鍬を握れば太陽は

魚の鱗□光り
トロコを押せば太陽は
レールの上にうつる。
彼等はそこでいぢめられ
彼等はそこでしいたげられ
彼等はそこでさげすまれるが
太陽の外は
なんにも知らぬのだ。
（故大城永昌氏の霊に捧ぐ）

タイムス俳壇（大正十二年一月九日付け『沖縄タイムス』）

私の近頃　亜鳥

時君洞兄に

人のゆさきに淋しくも鏡かけ置けり
遠き家の壁白く風に光りをり
とも□淋しく寂し母の頬骨に寒さ増して
猫の鳴き声まねる児に其猫たまり
夜なべの妻が傾むけし耳に子は静か

父の膝を離れまいとする児を無理にして
燃えさかる火をいつまでも去らぬ迎ひ合ふ児ら

といったように積宝の詩が掲載された「朝日詩壇」をはじめ「朝日歌壇」「タイムス歌壇」「タイムス詩壇」「タイムス俳壇」などが健在であったことがわかる。

ざまみ寒風の「太陽と彼等」は、いわゆるプロレタリアート詩とでもいっていいものである。比嘉春潮は『沖縄の歳月　自伝的回想から』のなかで、「(大正) 十年、十一年はアナ・ボル論争の最高潮の時期、そしてアナーキスト全盛の時代となる」といい、「城田兄弟、宮城不泣ら、沖縄のアナーキストも大杉、近藤憲二らの雑誌『労働運動』や『労働者』に依拠してサンジカリズムを支持、主張し、われわれの研究会は堺、山川の雑誌『社会主義研究』、河上肇の個人雑誌『社会問題研究』をテキストにして、マルクス主義の研究に傾いた」と回想している。ざまみ寒風の詩は、A＝アナーキスト・グループとB＝ボルシェビキ・グループとに別れて「それぞれに社会主義について、異なった見解を持っていたが、中央のように対立抗争するほどではなくて、なにかというとアナもボルも一緒になって会合したり、講演会に出たりしていた」といわれるような沖縄の思想界の動向をうけて書かれたものであったに違いない。

翌大正十三年四月一九日付け『沖縄タイムス』は、宮城無々の「知識階級としての芸術家の社会的立場に就て」を掲載していた。宮城のそれは、「下」しか収集されていないが「アナ・ボル」時代の情況を反映したものであった。

ざまみのいわゆる無産者をうたった詩が『沖縄タイムス』に掲載されたのは大正十二年一月九日で、五月十四日には上里春生の「詩話」が現れる。上里はそこでシエリー、ブルンテイエール、ポー、ハヅリット、コールリッジ

などの言葉を紹介したあとで、詩が「他の文学よりも純粋な文学」であるといったことを説いていた。

○

大正十三年は、八年から十二年までと比べ比較的多くの紙面が収集されていた。それだけに情報量も多くなり、様々な動きが伝わってくるが、その中で、文芸界も大きく動き出していく様子が見られる。

三月二十一日には末吉麦門冬の「序に代へて」、二十三日には伊波普猷の「琉球文芸叢書に序す」という文章が『沖縄タイムス』に掲載される。

麦門冬は、そこで「池宮城君！」とよびかけ「君の郷土文学叢書発行の企だては誰も考へてゐて実行の機会を得なかつたもので、至極賛成です。文学普及の為め其の効果頗る大なるものがあらうと思ひます。どうぞ根気よく続けて下さい」と前置きし、

扨てこれに序を書いて呉れとのお頼みですが、何を書いてよいものでしやう。

此間御話したやうなものを書きませうか。私達の要求する所の郷土文学は一体どうあらねばならぬのかと云ふことは、私も考へないではありませんでした。一と口に云ふとそれは私達この郷土に生れたのでなければ感じ得ない、把握し得ない、創造し得ない表現し得ない内容でなければならぬと思ひます。本当の沖縄と本当の沖縄人が出て来なくてはなりません。而してこれを得るには、殊更に私達が郷土の色を深めやう濃くしやうなどと意識的に努力しては駄目です。さうすると却つて他国若くは他県の者が、私達及び私達の環境を描いたものにあるやうな、□種の誇張され、歪曲されたものに似通つたものになります。それ□は私達の持たうと望んでゐる或物□如実にあらはれません。似ても似つかぬものとなつてしまう恐れがあります。殊更に他人に見せる

やうなものであつてはならぬ□吹聴や宣伝では否ません。みせびらかしではない。私達自身がそれと面して恐れたり、厭気がさしたり、憤つたり、不満を感じたり軽蔑したり憐憫したりする中に、又私達がどうしてもそれから離れることの出来ない、いはゞ運命づけられた、吐息をつかさるゝやうな内容がもられてなければならぬのです。それに反しては到底嘘にしかなりません。それを私達□狙ふ□しかも殊更めかしく狙つてるぞ□意識したり、努力したりせずに到達するのです。自然に搾り出された私達自身の苦汁をそこから酌むのです。誰も自分の姿に余り感心しない、鏡に向つて多くの人々は不満を抱きます。憤ほろしくなります。美しいと己惚れることはありません。私達が創造しやうとする郷土文学もその厭やな思ひのする鏡裏の映像ではありませんか。けれどもこの厭であつても、自分達の姿には、私達はどうしても逃げもかくれも出来ぬものがあります。ツルゲネーフでしたか、彼は□□□露西亜嫌ひであつた。彼は自分の嫌ひな露西亜から逃れて大陸へ行つたものです。けれども彼の文学は遂に露西亜に帰つてきました。そこから逃げもかくれも出来ぬ運命でした。彼はその作中に（何でした忘れたが）他国で自分の郷里の者にあつた□の醜汚な盛（かしけ）を書きわざ〳〵その者から逃れる為めに道をよけたと云ふことを云つたが、私達も他郷に行つてよくその感じをさせられます。けれどもそれは私達がその醜汚を感ぜしめるものと、（以下、破損により、二十四行？読解困難）

と続けていた。破損個所で池宮城の「奥間巡査」について触れていることがわかるが、末吉は、池宮城が企画した「郷土文学叢書発行」に賛成の意を表すとともに、「私達の要求する所の郷土文学は一体どうあらねばならぬのか」と自問し、「私達この郷土に生れたのでなければ感じ得ない、把握し得ない、創造し得ない表現し得ない内容」を盛る必要と、そのための方法に関する持論を展開していた。

伊波普猷もまた「寂泡君！」と呼びかけ、

小民族のクセに特種の歴史や言語を有つてゐるといふことは、現代では少くともその不幸の一でなければならぬ。これだけでも彼等は奴隷にされるべき十分な資格を備へてゐるといへる。私はかつて日琉同祖論を唱へて、学者や教育家の了解を得ることが出来たが、政治家や実業家の同情を得ることは出来なかつた。君たちは沖縄青年が後者の仲間入りをしようとして、この四十年間にどれほど苦い経験を嘗めたかを知つてゐるだらう。また彼等の或者が学者の仲間入りをした、学会に多少の貢献をしたことも知つてゐるだらう。

――彼は畢竟門番や別荘守になるべく運命づけられてゐる。これを見せつけられた君たち利口な青年は、たうく芸術の方面に走つていつた。そこでは個性といふ資本さへあつたら、金主や同情者がゐなくても、大した差支がないからだ。けれども君たちはこの個性を表現すべき自分自身の言語を有つてゐない。君たちが有つてゐるのは、それは借り物だ。この借り物を自由に使用し得るまでに□君たちの年齢と精力とは大方浪費されて了ふ。だから沖縄人にとつては、小説家になるのは、アイヤランド人の小説家になるのと同じ位に、困難であらう。彼等はこの言語といふ七島灘を越えた暁に、はじめてショウやイエーツやシングのやうに鬼才を中央の文壇に送り出すことが出来やう。

寂泡君！

さうはいつたものゝ、沖縄人もやはり模倣性の強い人民だから、この外部的の困難には、遠からず打勝つことが出来やう。が、今一つ内部的の困難が根強くこびりついてゐることを知らなければならぬ。君も知つてゐる通り、沖縄人は理性や感情や直覚力がよく発達してゐるわりに、意志の力が非常に弱い。そして境遇や性格の

上から政治や実業にたづさわるよりも、文芸や思想の方面に向ふ者が多いが、意志が弱くて、移り気があるせいか、成功した人は至つて少ない。さういふ方面にはたしかに適してゐるに相違ないが、折角有つてゐるものを推出す力に乏しい。この推出す力はとりもなほさず意志だ。琉球入後殆ど三百年間、この大事な意志を動かす自由を与へられなかつた為に、沖縄人はたう〳〵ヒステリツクになつて了つたのだらう。今や私たちはこの特種な歴史によつておしつぶされてゐる。私はグルモンと共にかう叫びたい。

「――歴史を全然廃してしまふ口いいのだ。即ち各時代に於て過去の不用な証跡を悉く消してしまうことにするのだ・・・・。――それは面白い。今や吾々は歴史によつておしつぶされてゐるのだからね。」

寂泡君。

私は「琉球文芸叢書」の首途を祝福する前にこれだけのことを書いた。私は君のアルバイトが私たちをおしつぶしてゐる重荷をはねのける一つの槓桿であることを希望する。

大正十三年三月十九日、

郷土史料室にて

と書いていた。

伊波は、言葉から気質へ、気質からさらに歴史へと論を進め、池宮城の「アルバイト」が、沖縄人の「重荷をはねのける、一つの槓桿」になつて欲しいと、池宮城を鼓舞していた。伊波が、そこで強調したのは、「意志」であった。それは「文芸や思想の方面に向ふ者が多いが、意志が弱くて、移り気があるせいか、成功した人は至つて少ない」と、伊波が思っていたからであり、池宮城の「移り気」を、伊波が危惧していたことのあらわれでもあったで

あろう。

末吉麦門冬、伊波普猷の序をもらった「琉球文芸叢書」が、その後どうなったのかよく分からない。池宮城が、よく知られているように放浪の人生を送っていたことからすると、とても成功したようには思えない。

大正十三年にはそのように「琉球文芸叢書」の刊行という企画が登場。その結末は、明らかではないが、企画そのものは、画期的だったといえた。

○

大正十三年には、あと一つ注目すべき出来事があった。大正十三年四月十日付け『沖縄タイムス』は、「若き琉球を標榜する　「歌人連盟」生る　南島文壇の新機運動いて各派を統一せん」の見出しで、次のように伝えていた。

他と比較して珍しい程に発達してゐる県民の文芸の面は中央の文芸隆盛に連れて数年来著しく発展の度を高めた　絵画に於ける丹青協会□□葉会、演劇に於ける劇□□音楽に於ける琉球音楽会等何れも本県文芸の改造革新に努めてゐるが独り残念な事には純文学の方面は纏まつた組織がないために目立つた仕事をなしてゐない、殊に詩歌は最も盛んになり一般的になつて詩歌人は多数輩出してゐるけれども各々小さい派を形成して謄写版刷りの小冊子に蹋躇して若干の進展も見せてゐない　然し常然統さるべき現状の詩歌界の気運に乗じて若き琉球を標榜する詩人上里春生、伊波普哲、国吉灰雨、山口三路諸氏と女性の方では真栄田忍冬、名嘉原文鳥、水野蓮子、我謝ミチ子、諸女史等が団結して歌人連盟の名の下に県下数十人歌人の統一を計る詩歌雑誌を発行する計画中であるが同連盟は老若各派何れを不問広く連盟内に包含する由であるが既に斯界の先輩末吉落紅、上間草秋、山城正忠、漢那浪笛、名嘉元浪村、北村白楊、稲福千代次、諸氏の連盟に加はるゝ事になつた　左

に歌人連盟の趣意書を記す

として「連盟則」および「連盟の本領」を掲げていた（「連盟の本領」は新聞が半面しかないため、欠如）。

記事はそのように「歌人連盟」が「詩歌雑誌を発行する計画中である」と報じていた。記事に見られる名前をみれば、作品を集めるのに苦労することなど何一つなかったと思われるが、これも雑誌が出たかどうかは不明である。「琉球歌人連盟」については、山之口貘の回想があった。[14] 貘はそこで「そのころ、短歌もつくっていた。国吉真哲、新島政之助、桃原思石、上里春生、伊波文雄らとつき合った。ぼくらは「琉球歌人連盟」を起し、泊高橋の近く、かた原よりのある二階屋に「琉球歌人連盟」という大きな看板をかかげた。その看板の字はぼくが書いたのである。ぼくたちは毎日のように真哲の家に集まり、啄木調の短歌を朗詠したり、酒をのんだり、時には辻の色町に足を運んだり、そんなことばかりして暮したのである。外に中山刑がいたが、かれは琉球歌人連盟の資金をつくるために、その事務所の階下で、洗濯屋を開業したのである。しかし資金どころか、業としても成り立たなくなった。琉球歌人連盟と共に洗濯屋もいつのまにか消滅してしまったのである」と書いていた。貘の回想からすると、雑誌を刊行するまでにはいたらなかったのではないかと思われる。

雑誌の刊行はともかく、名だたる詩歌人を集めて「歌人連盟」を発足させたということは、一大事件であったといえるだろう。

『沖縄朝日新聞』の「骸骨塔」欄は、「歌人聯盟」発足の記事を受けて、四月十三日には、さっそく「万物「性」の働く時は春なれや。琉球詩歌人活動開始の報あり曰く「歌人連盟成る」と」と寸言し、四月十七日には「琉球歌人連盟と云ふものが出来て女流歌人真栄田女子が朗かな声で宣言書を読み上げた「琉球の歌人団結せよ」とは云てな

かったらしい□時節柄全く朗かな声だ」と書いていた。「骸骨塔」欄の記事は皮肉たっぷりで、「女流歌人」たちの登場を揶揄していたばかりでなく、詩歌人の大同団結は、それほど簡単なものではないと考えていた節がある。

大正十三年に発刊された新聞で収集された文芸関係記事には「歌人連盟」に名を連ねていた上里春生、伊波普哲、国吉灰雨、山口三路をはじめ末吉落紅、上間草秋、山城正忠、漢那浪笛、名嘉元浪村、北村白楊、稲福千代次の作品は見られないが、六月二十八日「朝日歌壇」には、池宮城美登子の「別離」十五首が掲載されていた。

ゆかばゆけ居れば居れてふ気も軽く夫と別れぬ桟橋にては
悲しみは胸の底より起り来る夫と別れてかへりしときに
夫をいたみ寝ねがたきかなこゝに在りし時には死をも願ひしわれの
友よわが夫をいたはり慰めよ心いたみて旅へゆくなれば
思ひ立ちて旅にゆくてふ一言におどろきもせ□見送りしわれ
せめて今宵君と語らばしみ〳〵と心慰めて別れしものを
如何に〳〵寂しかるらん吾子も今父をしたひてひた泣くものを
その胸に酒虫巣くひてあるならん狂人のごとき夫のふるまひ
あまりにも心昂ぶり寝ねられずと丑満頃を夫は出てゆく
狂乱の日や近からんはら〳〵と気づかひて暮し二ケ月となれり
心いやさばとく帰りきせ父を求む吾子を思はゞ早かへり来よ
許してよゆかばゆけとておひやる如くに君を送りしわれを

つかれたるたましひを抱きとぼとぼと旅に行く夫の姿は寂し
もし夫の心いえずば吾子もわれも悲しき生命を如何すべけむ
わが運命悲しけれども虚無の世に何を求めんやあきらめに生く

夫・池宮城積宝との間に子をもうけながら、家にいつかない夫との別れをどうしようもないものとしてあきらめようとする悩める心を率直にうたったものであった。新垣美登子は『哀愁の旅』で「この歌は寂泡と三カ月同棲した時の作で、私はその頃、寂泡があまりに、普通の人の行動とかけはなれているので、いつ気がちがうかと心配しながら暮らしていたが、早く彼が放浪の旅に出ることを願っていた。彼は私の愛情を求めもしないし、私もまた彼に何も期待しなかった」と書いていた。

同じく七月十日の「朝日歌壇」には、「垂乳根を売る　山城正忠さまにこの拙き歌稿をささぐ」として、水野蓮子の作品が掲載されている

ま寂しき人な思ひそ我がおもひ君がみ前に言葉とならず
言にいでてそれを云はぬはあまりにも胸はりつえて思ひ深かり
垂乳根の母を売るかや恋のためあはれ売るかやあななかなし
たへて来しこれの月□のわびしさに我が世終るかまた生くる日も
忘れゐる□とはなきを思出る日□ありやなし我の心は
思ひつめ思ひ切り□か狭庭辺にこゝだと散りしあわれ薔薇の花

いつしかは消ぬべき命人おもふこ□の心に春も暮るかや

◇嘗て「乱潮」に我を笑ひし氏へ

世の人よゆめな笑ひそ人恋ふるこのをみな子をあはれと□思へ

君思ひ君を慕ひて生くる身の女心のとがめありや

水野九首は、恋慕う心のゆれをうたったものであった。

大正十三年は、積宝の企画した「琉球文芸叢書」の刊行予定、「歌人連盟」の創設とその雑誌の刊行予定が発表されたことで注目されてしかるべき年だっただけでなく、沖縄の短歌界を活気づけていく美登子、蓮子といった女性歌人とともに比嘉俊成が登場してきたこと、さらに伊波月城の「海の彼方へ」の連載が見られた。新人たち、とりわけ女性の表現者の登場とともに、かつて時代を牽引し、啓蒙的活動に熱情をそそいだジャーナリスト・月城のその後の歩みを教えてくれる文章が掲載されていた。

伊波月城は、伊波普猷の弟、普成。大正になると主に外国の文献を翻訳紹介しているが、大正九年五月にはサー・オリバー・ロッヂの「宗教の本質」、八月には「露国に於ける宗教運動」の連載といったように、宗教関係の本や論考を訳して紹介していた。[15] そして、十三年の「海の彼方へ」の連載となるのだが、そこには、かつての、時代と文学の革新・変革を論じた熱情的な啓蒙家の姿はなくなっている。

大正十三年は、また、沖縄の文芸家、論壇人たちにとって忘れられない、大きな悲しみをもたらした年でもあった。

俳句、漢詩、短歌、随筆等に健筆を振るった末吉安恭が、不慮の事故で亡くなったのである。新聞は十二月十二

日から二十六日まで伊波普猷、仲吉朝助、田原煙波、島袋全発、山城正忠、伊波月城、太田潮東、島袋盛敏、比嘉朝健、漢那浪笛、寂泡生、渡口政興、上間草秋、真境名笑古、富山嘉続、池宮城美登子、東恩納寛敷、山田有幹、東恩納寛惇、といった当代の代表的な文筆家の追悼文を載せていた。

彼等の追悼文から一言ずつ引いておくと「博覧強記で特に琉球文学界の権威であつた」（伊波普猷）、「今までの日本派を去つて新傾向派として立つやうになつたのは慥かに君によつて啓発された或物を感じたからであつた」（田原煙波）、「君は郷土研究に指を染めるやうになつたのは、時代の要求の然らしむる所であつて、語を換えて言へば、彼がジアナリストとして出産した時代は所謂琉球文化のルネサンス時代で其朝夕友とする所の者は、凡へて新時代の使徒等であつたことに起因する」（伊波月城）、「俳人としての麦門冬、歌人としての落紅、漢詩人としての莫夢、郷土史家としての末吉安恭□は一見凡俗□よろづ屋の様に誤解されるが、各専門家が出て相撲を取つて見るとなか〳〵強いので皆□俵外に押し出されるのも是れ又特徴である」（漢那浪笛）、「末吉さんには「狂死したワイ」と云ふ中編小説の創作がある今年の初夏に出版するお約束で纏めて貰つたが、僕の方の都合が悪くてとう〳〵出版の運びにならなかつた」（寂泡生）、「新婚当座の私をモデルにした小説を発表して私を苦笑させたりしてゐた」（上間草秋）、「彼の血管にはその祖先の歌人摩文仁安祥□宜湾朝保編沖縄古今集中にある一人――の血が流れてゐると共に多少政事家――三司官摩文仁安政――の血も混つてゐたのであらう。即ち情操と理知が可なり巧みに配合されたひとであつた」（真境名笑古）、「氏は一見無愛想で、あの巨大な体躯の中には、何処にも当世風の巧言令色といふ点は見出せなかつた」（富山嘉続）、「沖縄毎日の記者で諸見里氏や山城翠香南村等と云ふ方々と健筆を揮つて居た」（長浜□州）、「彼は、沖縄のやうな不便な処にゐて、珍しい程物を読んでゐた。詠んだものをならべて行く点に於て、彼は、球陽の小南方であつた。彼の史論は述べるのであつて、論ずるのではなかつた。彼の史筆に結論がない如く彼の人

物にも結論がなかつた。よく云へば彼は初めから□境に入つてゐた。彼の生涯は、障子の陰を通つた大人のやうな気がする。素通りしたが影は大きかつた。開けて見ると、もう居ない。彼は既成でもなければ、未成でもない、恐らく。成は彼にとつては問題ではなかつたらう」（東恩納寛惇）といった賛辞が並んでいた。

末吉が、どのような人物であったかこれらの追悼文からわかるのだが、これほど多くの追悼文が寄せられたのは、後にも先にもなかったのではなかろうか。末吉安恭がいかに沖縄の文界で大きな位置をしめていたか物語ってあまりある。

○

大正十三年の文芸界は、末吉安恭の突然の死という悲しみのなかで暮れ、大正十四年を迎える。

大正十四年は、収集された新聞も多く、文芸作品もその分多く見られるようになる。

冬色に茜さす日は登りたり小鳥よ啼き啼け雪遠き間に

この寒さいよゝつのらば川の音も氷の下にひそまるらんか

日の照りつ雪の舞ひ舞ふ冬空にこだまを返し鶏はひた鳴く

久方に映えし朝日ををろがむと窓を開けば雪片の舞ひ入る

変装の雪は悲しも舞ひ舞へとこのたまゆらの白雪にして

憎らしく可愛きものよじやれ雪は我が唇に止りては消ゆ

冬籠る我が部屋ぬちに炭聞きつ幼き□の友思ふなり

大正十四年一月二十九日付け『沖縄朝日新聞』の「朝日歌壇」に掲載された石川正通の「雪の□日本」七首である。石川は、英語に堪能な学者としてよりもむしろ「正通アワー」等の放談や、「シンシーヤフユー（普猷）シ、ウクサノーニントウ（忍冬）ミセーン」[16]といった語呂合わせ、洒落、地口にたけた漫談を得意とする先生として知られた人である。石川は短歌だけでなく、すぐれた沖縄語詩を書く事のできたいわゆる文人であり、山城正忠や池宮城積宝らと親交があった。美登子の姉繁子は、石川の最初の妻であり、女高師受験のため上京した美登子は、石川家に同居していて、そこで、積宝に紹介され、結婚することになるのである。[17]積宝や、山城が訪ねていたというだけでも石川が、文学に浅からぬ縁があったということはわかるが、そこに、文学少女、美登子が、同居者として登場するのである。

大正十三年六月二十三日「朝日歌壇」に積宝との結婚生活を歌った「別離」十五首を発表した美登子は、大正十四年三月十一日には、四首（題なし）、四月十一日には「海辺」五首、五月からは「創作　一事件」を連載、大正十五年一月一日には「創作　手袋」を発表、同一月の半ばから「職業見合」を連載、女性作家として注目を集めていく。

美登子より少し遅れて「垂乳根を売る　山城正忠さまにこの拙き歌稿をささぐ」（大正十三年七月十日九首）を発表した水野蓮子は、大正十四年になって七月十七日「犬のごとく」八首、翌十八日「我を知る人への消息」六首、九月二十九日「寂しい存在」十一首といったように、精力的に短歌を発表していく。

美登子、蓮子の登場は、新聞歌壇への女性の登場を促した。彼女たちの登場のあと歌壇には富子、仙子、しづ子、英子、貞子、満木子、詩壇に久子といったような名前が見られるようになる。

○

大正十四年の文芸界は、先に上げた女性たちの登場とともに、入れ替わり立ち代わり数多くの表現者が登場してくる。その中で、短歌壇では光市路、松根星舟、伊豆味山人、當間黙牛、石川正秋、川島涙夢、比嘉俊成、伊豆味山人、禿野兵太、北谷孤星、安里猛郎、伊波文雄、詩壇では名嘉元浪村、志せき、白浜冷夢、川島涙夢、當間志□といった名前が目立った。創作では桃原思石「字の下手な男」「白昼の夢」、上武羅邦夫「郡道」「だから女は――痴人の手記――」、増英生「或る移民」、豊平頭夫「一ぱい喰はされた男の話」「春陽のいたづら」、池宮城美登子「一事件」、神山宗勲「燃えたつ心」、池宮城積宝「恋愛以前」といったのが見られるが、いずれも脱落が多く、連載の一部を読むことが出来るだけである。

大正十四年の文芸欄で注目されるものでは、新聞に掲載された作品についての読後評があった。四月八日、九日に掲載された政子の「水野蓮子の「垂乳根」を読む」が、その一つである。政子はそこで、前年七月十日「朝日歌壇」に掲載された「垂乳根を売る　山城正忠さまにこの拙き歌稿をささぐ」の歌をとりあげて論じているが、そのなかの一首「垂乳根の母を売るかや恋のためあはれ売るかやあなあな悲し」について「どうして私しの心を理解してくれないのであろう今迄女と言ふものはかくあらねばならない一つの道軌に当嵌めさせられて生きて来たものの、それはとても人間としての生活ではない殊に女はたつた一人の人に自分のこゝろを決めるのに何故女は恋をしてはいけないのだ女は生きる限り愛にこそ生くるのであるにそれは歴史がよく物語つてゐるのに女の生命はたつた一人の人にこそ生きるのであるのに母は何と言ふ理解のない人であらう若しも私しが彼の人の前に走つたら母は悲しみに衰え、ことに怒るであろう顔を掩ひ身を投げて母は嘆くであろうが私しとしてはとても彼のひとのことを思ひ切ることは出来ないいゝえ私しの生きてゐるのもこうして忍従に耐へてゐるのも総ては皆んな彼のひとの為であるのだ、かくすると私しは母を売らなければいけないのか彼のひとを売るのか母を売るのか噫！私しはどうしようと、

どうしようと言ふ女こゝろの悩ましさを大胆に歌ってあると思ひます」述べ、その例証としてさらに四首ほど引用し、「とにもかくにも氏は女としての生きてゆくべき道を力強く歌ひ真実に自己を凝視するひとであると思ひます悲しみも悩ましさも寂しさも自分がこんなに生きてゐるのも只愛しい□たったひとりのひとの為めであるのだ彼のひとのことなればこそ、どんな苦しみにも堪へるのだと。ほんに力強く生るひとであるのを想像します」と論じていた。

「垂乳根の母を売る」一首をめぐる解釈、そして作者水野の歌の魅力について述べた政子の評は、当時の読者に、歌以上に訴えるものがあったのではないかと思われる。それは、歌が、読む人自身の身に引き寄せて読まれているからであり、歌は、そのようにも読めるのだと気づかせてくれるものがあったといえるからである。

短歌についての読後評が出て後の六月十三日には、旗雄の「――名嘉元浪村――「蛙」読後感」の掲載が見られる。

それは六月十日に掲載された次の詩にたいするものであった。

蛙こそは地上の哲人
月光と緑草と泥□(かいろん)に宿る
古雅で水色の旅人
緑青の眼に涙の睫毛
悲しい世界をピョンと跳ねて
地に蹲り空に憧れる

蛙こそは重苦しい芸術家
鉛色の脉官に微苦笑を漂はし
ニヤリと黄金の入歯を見せる
不得要領の性格の把持者
若草の夜露の中では
象牙の夢に泳ぎ
昼顔の咲く廃墟の舞台では
肉襦袢で跳ね踊る
赤い月の岸辺では
憂鬱に膨らんだ喉笛で
享楽の夜の雨を呼ぶ
窒息した白光の大気の中では
敬虔しく両手をついて
疑惑、困憊、呪詛、嘲笑も
グツと呑んでキヨトンとすます
鳴かず飛ばずの磊落もの

名嘉元は「蛙」を「習作」と付記するとともに、詩の終りに「――ごくつまらぬ作ですが読者諸兄の御批評を仰

ぎます――」と付け加えていた。その言葉に促されたわけでもないであろうが、旗雄は「習作以上に出ない作である大人の書いたクレヨン画の感ぢである不得要領の詩である作者は蛙を何べん位凝視した事だらう童謡につくりかえたら却ってはつきりする／鉛色の脉官に微苦笑を漂はし／ニヤリと黄金の入歯を見せる／読者の頭には不得要領でじょう慢の感じがする／鳴かず飛ばずの磊落もの／この鳴かず飛ばずの語（かたり）は漢文の本にある三年鳴かず飛ばずとかある語を使用したものなりや若しそう言ふ意味のものなら読者はこの所少しいやみありと感ず要するにすべてが混血児の感ぢなり蛙の腹わたをくぐり抜けて来て居ない感ぢもあるそして最後に智識の悲哀を感ずる、やつぱり歌人としてが浪村氏は感じがいい好い処も沢山ある然しそれは言はなくとも他の読者は分ることだらう妄言多謝」と「蛙」の詩が「不得要領」であり「混血児の感じ」であり、「知識の悲哀」を感じさせるものだとし、浪村は、詩より短歌が断然いいとしていた。

そのように、「蛙」の詩をまったく評価しない評が見られた一方で、同日の新聞には、次のような詩が掲載されていた。

「蛙」　志せき

蛙よ
何んと言ふ貴様は不恰好者だ
毒を食つたら腹わたを出して水に洗ふんだつて
紳士達が倶楽部で呑みすごした酒づけの腹をなでた時
お前のそうした得意の芸当をうらやましがるだらうよ

だがお前の水中の恋の芸当はダダイスト以上だ
だが一寸不気味なのはお前のその冷たい肌だ
それはアイマイ屋の白首の淫売屋の感じ馬鹿もつとふざけろ
美しいはずかしがりやは過去の詩人だよ　そして一生に一度小屋を建て幟を立てゝ
無料でもいゝ
上品な
だがマスターベーションを楽む逃避の詩人に見せてやることだ
その時おれはただでポスターを書いて
宣伝の役目も俺がする

志せきは、多分桃原思石。その時彼は「創作　字の下手な男」の連載を始めたばかりであったため、別表記にしたのであろうが、名嘉元の詩に、感じるものがあったのであろう。志せきには、まだ物足りないものがあったとはいえ、これまで詩壇を飾って来た詩には見られない新しいものを見出し、応援する気持ちになったに違いない。なかなかに機知に飛んだ、これまでに見ない詩による評となっていた。

その三日後の六月一八日には高江洲義雄の「私の芸術観（下）」が掲載されている。高江洲は、そこで、創作の神髄は「一人の人間の彼自身の真を書く」所にあると主張し、「若い作家の芸術作品として最近朝日文壇紙上に発表された特に創作を読んで見ますると何だか私に取つては物足りなさを感じました」と書いていた。

短歌、詩、創作に関する評が、そのように紙上を賑わすようになっているが、それは、多分に、新聞と読者との

間の距離が縮まってきていたことを示すものであった。そのことをよく示しているのが、投書欄「麦笛」である。

五月十七日『沖縄朝日新聞』の同欄は「朝日の文芸欄発展を目にしつゝ國男どうした白楊どうした寂泡どうした無尽の計算、盃のやりとり、政治屋のまねはほど〳〵にして紙上に顔出せ」といった海草人の投書を掲載していた。

海草人の本名はわからない。彼の投書からすると、大正十四年頃には、寂泡はともかく國男、白楊は歌作を発表することがなくなっていたように見えるが、その國男が、海草人の投書にたいし六月三日「無駄話　無尽とピンポンと海人草」と題し、返答していた。

國男生は、そこで「五月十七日の麦笛欄で海人草氏が白楊、寂泡と僕三人へ朝日新聞文芸欄顔出しを慫慂してゐる。それを見て怒ったのでもなければ勿論悦びもしない。然し僕のやうな者は思ひ出して貰ふだけでも感謝しなければなるまい」と書き出し、海草人が挙げていた三名について「僕たち三名のうち白楊は田舎の校長さんだから献酬の機会は多いことだらう、寂泡が政談演説めいたことをしたといふ噂は僕も聞いて知つてゐる、かう配当してみるとあと無尽の計算と僕が残されたわけだ、田舎には所謂無尽は無いから白楊でもなからうし寂泡に到ってはとても無尽なんて考へた事すらあるまい、考えたって□□することより先づさきに取る方を考へるだらうから無尽にならない、さうなれば勢い僕が無尽を受持つわけだ」といい、自分が小学校に勤めていた頃職務で庶務にまわされ、ソロバンをはじいたことがあることから、誤解したのだろうが、自分には無尽の計算なんてとてもできることではないし、好きでもない、といったことを書いていた。

これは、大正文壇史の一挿話としても面白いが、新聞は、そのように読者同士が応答できる場として身近なものになっていたことがわかる。

○

政子の水野蓮子の短歌評が出た四月九日、「朝日歌壇」に松根星舟の短歌九首が掲載されている。その中に次のような歌が見られた。

愛し子を女工にやりてよろこべるその親見れば涙さそわる

漁（すなどり）をすてて職工に行くといふ故里人をなげかひにけり

松根の短歌が掲載された前の月の三月十七日、『沖縄朝日新聞』は「うづまく不景気風に物凄い出稼男女工の群」の見出しで「国頭郡の人口統計に現はれた男女工の数」を報告していた。県外に出て行った「男女工」は、国頭郡だけではなかったであろう。「沖縄県の窮状」を訴える記事が紙面にとぎれることなく現れてくるように、大正末期の沖縄はいわゆる「蘇鉄地獄」と称されるような状況を呈したことは湧上聖人の『沖縄救済論集』等に収録された報告に詳しい。

松根の短歌は、そのことを語るものとなっていた。また八月十八日から連載の始まる増英生の創作「或る移民」も、その時代のハワイ移民たちを見舞った事件を扱ったものであったといっていいだろう。[18] あと一つ付け加えておけば、十月一日付け『琉球新報』[19]に見られる川島涙夢の「或物語（二）」にも、紡績に行く島の女性たちを港で見送る光景が描かれていた。大正末になると、移民や出稼ぎについて触れた作品がにわかに多くなっているのがわかる。

大正十四年には、短歌の分野で、注目される作品が現れていた。

草の上の夢に生きてた俺が真上をふわり〳〵雲が飛んでた

禿野兵太の「秋風吹けば（口語歌）――地□の友に捧ぐ」と題された九首の中の一首である。歌壇には新しい傾向の作品が現れていた。

歌壇は、そのように「口語歌」が登場してきたばかりでなく、いわゆる歌人と呼ばれておかしくない人たちが登場していたが、まだ個人の歌集に関する情報は現れてこない。詩壇も、世禮國男の『阿旦のかげ』以後、どのような詩集が刊行されたか文芸記事からは判然としないが、大正十四年には下地一秋の「詩集　死沼」というのが書店の広告には見られた。

○

大正十五年、大正最後の元旦一月一日の『沖縄朝日新聞』は、美登子の「手袋」と新垣晃の「疑似恋愛」を掲載していた。新垣の作品には「懸賞当選小説」と付されている。それからすると、新年の紙面を飾るために、小説を公募したのであろう。また一月の下旬から、美登子の「職業見合」や、小泉左伝の「創作　八重ちゃん」を連載していて、小説作品の掲載に力をいれたことが分かる。

文芸欄の充実を図って行われたに違いない「懸賞小説募集」は、『沖縄朝日新聞』だけが行っていたのではない。同様な試みが『沖縄タイムス』でも行われていたことは、大正十五年五月「上之蔵新垣病院の元薬局生が自殺　題「なみだ」本社の懸賞に応募　小泉左伝で」という記事からわかる。小泉の「なみだ」の掲載が何日からはじまったのかは不明。五月二十七日には五回目が掲載されていることから、小泉の「自殺」を報じた記事のあと、すぐに連載が始まったのではないかと思われる。小泉の小説は、作者の自殺ということもあって話題を呼んだに違いない。[20]

大正十五年六月十二日付け『沖縄タイムス』は、南部修太郎の「「さまよへる琉球人」に就て一つの感想（下）」を掲載している。「上」は収集されてないが、「下」は、植民地下にあった朝鮮からきた学生たちのことや、沖縄青年同盟の「質問状」が呼び起こした感慨を記していた。

南部は「朝鮮の青年の私に対する詞や広津氏への質問状に現れてゐる琉球の青年達の訴へにはさもあらう、尤もだといふやうな心からの同感で耳を傾けずにはゐられない。が、併合後の日も浅い朝鮮のことはこゝでは暫く別として、私達が新領土意識など全くうしなひ、しかも、南海の平和安楽な島国のやうに想像してゐた琉球の青年達から被統治者意識を底に持つたあゝいふ訴へを聞かされたばかりでなく、そこが経済的危機に瀕してゐる島国でかれ等の前には一種の飢渇の日さへ迫つてゐるといふ事実を知らされたことは、私にはあまりに思ひ掛ないことであつた。そして、私は、ちよつと暗澹たる感じを覚えた」と自省したあと、続けて「一視同仁とか、共立共存とか、親和融合とかいうような美しい言葉が始終口にされていながら、それを裏切るような事実を私達はあまりに度々見聞する。それにしても琉球の青年達からまであんな訴へを聞くことは、私達の恥だ。とりわけそれが何の反抗力も持つてゐない処の、少数の、弱々しい人達からの声であるだけに――15、5、18」と書いていた。

広津和郎の「さまよへる琉球人」が、『中央公論』に掲載されたのは大正十五年三月号。それに対して沖縄青年同盟の「広津和郎氏に抗議す」が『報知新聞』に発表されたのが四月四日。広津は四月十一日、同紙に「沖縄青年同盟諸君に答ふ」を発表するとともに、『中央公論』五月号に「沖縄青年同盟よりの抗議書――拙作「さまよへる琉球人」について」を発表していた。[21]

同作にたいしてはさらに青野季吉（『毎夕新聞』五月、「広津氏に問ふ」）と広津（『読売新聞』六月十日～十三日、「二つの気質――青野季吉氏に答ふ」）との間で応酬があり、六月まで尾を引いていくが、南部のそれも、広津と沖

縄青年同盟との間の応答に触発されて書かれたものであった。

広津の作品及び広津と沖縄青年同盟との間の応答をめぐって沖縄現地の新聞は多くの記事を出したはずである。これまた新聞の収集にむらがあるため、今の処、ほとんど見ることができない。

広津の作品に対する沖縄青年同盟の抗議は、広津の、自作の抹殺ということで落着する。大正期の筆禍事件として、あまりに有名だが、沖縄をめぐる記述に関しては、他にも「抗議書」ではなく「決議文」が提出されたことはあった。

大正十四年六月十六日付け『沖縄朝日新聞』に掲載された「関西県人会だより　廃れつゝある琉球の弊風紹介に対する県人会の抗議」と題した記事がそれである。関西県人会支部大会は、六月六日から『大阪毎日新聞』の夕刊に連載された「新琉球への旅」にみられる「生豚を頭上へ」といった記事を取り上げる。そして、ただでさえ「蔑視と冷笑」にさらされている県人を窮地に追い込み「県人発展の障壁」になるので、決議文を作成し、新聞社に送り交渉したいとの意見がだされ、一時騒然とするが、挙手による採決で、同案は認められる。その決議文は、次のようなものであった。

民族問題の紛糾しつゝある今日兎もすれば民族的に蔑視せらさんとする沖縄県情を紹介するに際し御紙六月六日夕刊連載の「新琉球への旅」及び全欄挿入の写真は社会一般に吾が沖縄県をして益々侮蔑の念を抱かしめ□いては県人の向上発展の障壁を成因するものと思惟す

種々の弊風は県内の有識者及び当県人会において徹底的掃蕩をなすべく運動しつゝあり。我等は事実の如何に拘らず新聞社において県情風俗の如きを紹介するに当り他府県における県人の社会的地位にも御同情と御理

解を賜り慎重に取扱ひ下されんことを切望す

右決議す

大正十四年六月七日

関西沖縄県人会港区第一支部大会

大阪毎日新聞社編集部御中

『大阪毎日新聞』の記事が、関西沖縄県人会で物議をかもし、「決議文」が草されたのであるが、同様な出来事がいろいろとあって、大正十五年には、広津作品で爆発したようにもみえる。いずれにせよ、小説作品が、大きな社会的関心を呼び起こすものにもなる、ということを同作品は示したのである。

広津の作品には、三人の沖縄出身青年が登場していた。広津が出入りした出版社に勤めるM、いかがわしい製品を広津のもとに持って現れた見返、そして広津の本を借りて返さなかったOの三名である。彼等が、広津と関係をもったのは、多分、三人が三人とも、文学に関心があったことによる。沖縄から上京した文学志望の青年たちは、明治期の末吉安持や摩文仁朝信らがそうであったように、著名な作家をたずね、同門に加わり活動することをめざした。大正の青年たちもそれは同様であったといっていい。

大正十五年八月『琉球新報』は、船越尚武の「東都文士印象記」[22]を連載していく。船越のそれは、かつて沖縄から上京した作家志望の文学青年らが、有力な文士の門を敲いて、そのことをとく〳〵と沖縄の新聞に書き送っていたのを彷彿とさせる。

大正十五年は、小説の掲載が、増えてきたように見えるが、それ以上に、短詩形作品の掲載が相次いでいた。

詩壇では、収集されている詩は一編ずつだが宮里静湖[23]、新屋敷幸繁[24]が登場、俳句では、一月三十一日の「朝日俳壇」に「榕樹会選句」として、作品集の掲載が見られる。

「文芸欄の充実を期さんが為め俳壇を設けます」と「朝日俳壇を設く」の見出しで社告が出されたのは、大正十四年七月十七日。恐らく、その後すぐに「朝日俳壇」を設け、作品も掲載されたに違いないが、現在見られるのは十五年一月三十一日に掲載された「榕樹会選句」からである。

一月三十一日に掲載された作品は、収集された新聞が反切れのため、下句と作者に不明な部分が多い。次に掲げたのは五月十九日に掲載されたものである。

作り並ぶる生地の壺次々に春陽吸ふ　瑞泉
そゞろ風の翻へす芽葉真昼の庭なり　みね女
一せいに花もちたる大根畠の陽よ　梨雨
行先告げず出た児長閑暮れて来た　みね女

作品は一点に十一句、二点に六句、三点に二句そして四点に四句あって、その四点四句である。この四句をみても分かる通り「榕樹会」は、いわゆる伝統的な俳句によらない作句をめざした人たちの集まりだったようである。四月三日「沖縄タイムス」に掲載された「近詠雑句」にも、

桑食む音静かなる夜を睡れる女　高木清風

といった句がみられた。それからすると、短歌に「口語歌」が現れたように、俳句でも大正末期になると、定型に寄らない句作が、試みられるようになっていたことがわかる。

俳句の掲載された紙面の収集が少ないため、その後のようすは不明だが、短歌壇では禿野兵太の「口語歌」のあと、「感激のない生活は嫌だ　友と酒を呑み野犬のやうに　闇をさまよふ」[25]「とつさんと芋でも作つて暮したが私は好きだ呑気でいゝぞ」[26]といった、やはり定型によらない歌が掲載されていた。俳句、短歌ともに、新しい表現の時代を迎えていたといえるし、それは詩壇についてもいえた。

俺は熱い報酬を
ひそかに待つてをつた

晴

雨

風

曇

月

雨

曇

風

雷
月
晴
とう〳〵来なかつた

十五年二月七日に掲載された仲本・松影の「恋の返書」と題された一編である。恋文への返事は、いつまで待っても来なかった、というものである。過ぎ去って行く日々を、天気を表す一文字を並べるかたちで表した、なかなかにハイカラで洒落た一編となっていた。

大正十五年の沖縄文芸界は、短詩形表現、とりわけ歌壇が花盛りであったといえるが、そのなかで、次のような文章が現れる。

歌壇の諸君！いや御老人方！漆黒の髪をきりつと天保時代のチョンマゲに結び上げた歌人諸君「けり」「かも」まかり間違へば「はも」なん□くつつけて「浅墨色の慶良間島」を「さびれ行く首里」を「裏山のこほろぎ」を万辺鳴く飽く事も知らずに無批評に駄句つてゐる諸君！

何と言ふ聖代の一異観！私は自動車上にフンゾリかへつた出来損ひの天保人を街頭に見出した気持だ。

さうぢやないか諸君、日々の新聞の短歌欄が諸君のチョンマゲの美しい（？）展覧会だと見たのが愚なのか不明なのか

諸君は恋愛を歌ふ　あのチョンマゲ姿の若年寄が　カンザシならぬ白魚の様なま手で砂上に恋歌を書き召

さる諸君ラブレターが見たいもんだ　雅語・古語で美しく縫ひとりされた美文を思ふただけで腹の筋が痛む

二月三日、「歌壇漫語」と題された狂犬生の歌壇評である。狂犬生は、その後さらに続けて、批評らしいものがないこと、「賑やかな寂しい歌壇」であること、短歌用語が「現在我々の使用する言語でない事」などを批判し、「我々は我々の言葉で新しい道を行かうではないか」と呼びかけていた。

明治末期の新青年たちも、旧歌壇の先達を「天保老人」と呼んで批判していたが、大正末期の文学青年たちも、同じく、旧態依然とした歌を詠んでいる者たちを「天保老人」だとして批判したのである。

狂犬生の「歌壇漫語」が掲載された翌二月四日『沖縄朝日新聞』は、「短歌雑誌『檳榔』」の見出しで「今回那覇に於いて當間黙牛、奈加峯緑葉、石川正秋、新島政之助、川島涙夢、水野蓮子等が同人として『檳榔』と言ふ短歌雑誌を発行する由なるが原稿は那覇市県庁の前奈加峯緑葉君のところにおくられたしと」との記事を出していた。

また二月六日付け『沖縄朝日新聞』には、「内海同人詠草」として島袋九峯、島袋哀子、星野茂、名嘉元浪村の短歌が掲載されていた。これは、「檳榔」グループとは明らかに異なる歌人たちが集まったグループである。

「檳榔」及び「内海同人」は、大正歌壇をリードした歌人たちの集まったグループだった。彼等は、狂犬生の「歌壇漫語」に最もよく反応したのではないかと思われるし、「内海同人」の一人名嘉元浪村は、後の事になるが「私の故郷琉球には歌人とも云はるべき人が皆無のやうに思ひます。たまたま中央歌壇に顔をのぞかしたかと思へばもう引つ込んで仕舞ひます。そして無精でひとりよがりでいゝ気になつてゐるのを視かけます」[27]と書いていて、沖縄の歌壇の現状を嘆いていた。

名嘉元の歌集読後評（一）が出た翌日の八月二十八日には「流動短歌会詠草（第6回）」として、瓦石、康一郎、

灰兎、興武の短歌が掲載されていた。

「流動短歌会詠草」は、自由律になる歌を試みたグループである。[28] 八月に六回目を迎えていることから、「流動短歌会」も、「檳榔」や「内海同人」とほぼ同時期に会を発足させていたのではないかと思われる。いずれにせよ、大正十五年には、多くの短歌会が発足して鎬を削っていたことがわかる。そのような歌壇花盛りのなかで、「歌壇漫語」などが出ていたのである。

岡本恵徳は、「大正期から昭和にかけての沖縄の文学活動の中心をなしたのは短歌であるが、このような短歌の隆盛をもたらしたのは、(中略)、各新聞に競って設けられた「歌壇」であり、それに投稿される短歌の選考にあたった山城正忠などの選者たちの力であった」と述べていた。[29]

岡本が指摘している通り、大正末期の短歌壇の隆盛は、[30] 各新聞が「歌壇」をもうけ、積極的に作品の掲載をしていったことにある。収集された大正十四、五年の新聞からはっきり見えてきたことの、それは一つであった。

沖縄の大正文学史は、まだ空白の部分が少なくない。空白部分を埋めるには、新聞の発掘を待つしかないが、三つの新聞集成が出てきたことで、とりあえず、その幾分かを埋めることができたのではないかと思っている。

注

1 『沖縄朝日新聞』大八、一枚、大十三、六～十二 二十八枚、大十四、一～十二、六十八枚、大十五、一～九、百八枚。『沖縄タイムス』大十一、三～四、三十枚、大十三、二～十二、百二十三枚、大十五、一～八、五十九枚。『沖縄時事新報』大八、九～十一、二十六枚。

2 『沖縄朝日新聞』大九、二～十、十五枚、大十、一、三枚、大十一、二～七、七枚、大十二、三、二枚、大十三、四～十二、二

十六枚、大十四、二～六、三十八枚。『琉球新報』大九、五～十二、九枚、大十、五～十二、九枚、大十二、三～九、十四枚、大十四、二～九、五枚、大十五、三、一枚。『沖縄タイムス』大十、六、七枚、大十一、二～十、十一枚、大十二、一～十一、十三枚、大十三、二～五、五枚、大十五、二～三、四枚。『沖縄日日新聞』大九、九、三枚、大十、二、六枚。『沖縄時事新報』大九、二～八、七枚。

3 『沖縄朝日新聞』大十三、六、七、三十九枚、『琉球新報』大十三、五～七、二十六枚、『沖縄タイムス』大十三、七、八、九、七十二枚。

4 詞書に「川平榕齋詞兄夢熊挙男児。端午吉辰。被招其賀筵。席上次真境名笑古兄芳韻。恭祝求正」とある。明治期の漢詩結社としては「吟風社」、大正期のそれには「蒸髦社」等があるが、笑古は、いずれの結社にも属することなく、大正中期まで漢詩を詠んでいたようにみえる。

5 『沖縄の歳月　自伝的回想から』昭和四四年三月二十五日、中央公論社。

6 仲程昌徳「演劇革新への胎動――「時花唄」をめぐって」『沖縄文学の諸相　戦後文学・　方言詩・戯曲・琉歌・短歌』二〇一〇年二月二十八日、ボーダーインク。

7 「文芸の人たち」『沖縄の百年　第三巻――歴史編　近代沖縄の歩み下』一九七一年九月二十五日、太平出版社。

8 『白菊の花　伊波冬子遺稿集　忍冬その詩・短歌・随想』昭和五九年四月十日、若夏社。

9 千原繁子「わが師」『随想集　カルテの余白』昭和五三年九月二十八日、若夏社。

10 「黎明期を生きる　対談千原繁子　新垣美登子」『那覇女の軌跡　新垣美登子85歳記念出版』一九八五年一月一日　松本タイプ出版部。

11 「琉球に取材した文学」『金城朝永全集上巻　言語・文学篇』一九七四年一月二十五日、沖縄タイムス社。

12 「文学と私」『新沖縄文学』第七号、秋季号、一九六七年十一月十日、沖縄タイムス社。

13 「新生」『哀愁の旅』一九八三年九月三十日　松本タイプ出版部。

14 「ぼくの半生記」『山之口貘全集第三巻　随筆』一九七六年五月一日、思潮社。

15 松浦雅子「鏡としての翻訳紀行文　伊波月城と来琉「異国船」訪問記①」『琉球アジア社会文化研究』第18号　二〇一五年十一月七日、琉球アジア社会文化研究会。

16 金城芳子「伊波普猷をめぐる五人の女」『那覇女の軌跡』前掲。新崎盛敏「正通先輩を偲んで」『石川正通追想集』昭和六十年三月二十三日、印刷センター大永。

17 金城、注16同。新垣、注10同。

18 小那覇三郎「布哇の将来」『移民の友』大正十五年十月二十日第二版、移民之友社。ドウス昌代『日本の陰謀　ハワイオアフ島大ストライキの光と影』一九九四年九月十日、文芸春秋。増英生は、吉本増英。吉本には「沖縄移民の発展」(『おきなわ　ハワイ特集』第十号、昭和二十六年三月十日、おきなわ社)などの著述がある。

19 浦添市立図書館蔵『琉球新報』大正十三年～十五年。収録されている紙面は大正十三年五月二十一日～十二月二十日、四十八枚、大正十四年一月一日～十一月十五日、五十八枚、大正十五年一月十九日～十月一日、六十二枚。「琉球歌壇」「詩歌」「詩壇」といった詩歌作品を掲載している紙面は、そう多くない。

20 池宮城美登子「小泉左伝を懐ふ」『琉球新報』大正十五年五月二十五日。新垣美登子「小泉を思う」『新垣美登子作品集』昭和六十三年五月六日、ニライ社。

21 広津和郎『さまよへる琉球人』一九九四年五月三十一日、同時代社。

22 八月十日の「東都文士印象記」はその(六)になっていて、そこでは牧野信一、中河與一を取り上げていた。

23 「海」『沖縄朝日新聞』大正十五年二月三日。

24 「労働神聖」『沖縄朝日新聞』大正十五年四月十七日。大正十五年十月、詩集『生活の挽歌』を出版。「労働神聖」は収録されてない。

25 春海口月「酔つ拂ひ」五首、『沖縄朝日新聞』大正十五年四月二十二日。

26 桃原思石「五月の歌」九首、『沖縄朝日新聞』大正十五五月十六日。

27 大正十五年八月二十七日、二十八日「歌集「ひこばえ」を読む——水がめ叢書第十編・松田常憲氏著」。

28 大正十五年八月二十八日『沖縄朝日新聞』「朝日歌壇」は、「旧七月三日新月の夜高橋町空想花園にて短歌会開催しました当日の収穫左記の通りです」として

獣の如き生活かたゞ生きて水を汲みつゝ歌ふ狂人　瓦白

その昔の匕首を握る殺意かも城間美智子よ駄々子の嘘　康一郎

裏道に二銭銅貨を拾ひし如し。わが半生の悲しき恋歌　灰禹

久しぶりに歌よまんと黙せしに百足遣ひ来て驚きて止む　興武

といった歌を掲載していた。

29 「近代沖縄文学史論」『現代沖縄の文学と思想』一九八一年七月二十日、沖縄タイムス社。

30 大正末の歌壇の隆盛ぶりは、新聞歌壇を見るだけでよくわかるが、さらにそのことをよく示しているのが、大正十五年に刊行された『琉球年刊歌集』である。同集「編集後記」で「本集の原稿の募集をしてから〆切までに稿を寄せて下さつた歌人三十有余氏その歌数四百余首、琉球に於ける主なる歌人の作品はこゝに於てほとんど揃つたわけである」と記していた。そこからも歌壇の隆盛振りはうかがわれよう。「編集後記」にはまた「尚ほ、「琉球詩集」は目下編集中」とある。詩集が、刊行されたかどうか不明である。